

平成27年度博士前期課程（外国人留学生選抜）問題 目次

		ページ
日本語試験		2～3
専門試験A・B		ページ
文化形態論	哲学哲学史	—
	現代思想文化学	4
	臨床哲学	—
	中国哲学	—
	インド学・仏教学	—
	日本学	5～6
	日本史学	7～9
	東洋史学	10～11
	西洋史学	—
	考古学	—
	人文地理学	—
文化表現論	日本文学	12～16
	比較文学	17～19
	中国文学	—
	英米文学	—
	ドイツ文学	—
	フランス文学	—
	国語学	—
	日本語学	20
	英語学	—
	美学	21～22
	文芸学	—
	音楽学	—
	演劇学	—
	日本・東洋美術史	—
	西洋美術史	23

平成27(2015)年度
大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程/外国人留学生選抜)入学者選抜試験問題

日本語試験

[問題用紙は2枚あります。]

次頁の文章を読んで、以下の問いに、日本語で答えなさい。答えはすべて解答用紙に書きなさい。

問1 傍線部AからEまでの漢字の読み方を書きなさい。

A 到達 B 隣人 C 諸変数 D 営み E 一層

問2 傍線部アからオまでの語句を、意味がもっとも近いと思われる語句に、文脈にあわせて言い換えなさい。

ア とるに足らぬ イ あるいは ウ つぶやく エ まさに オ にわか

問3 傍線部①「現地に長期間滞在し現地の言葉をあやつり、人びとの活動に自ら参加するようつとめさえすれば、現地の人びとと同様に考えたり振舞ったりできるようになるという、フィールドワークに関する夢のような神話」とあるが、なぜ「夢のような神話」なのかを、本文に即して説明しなさい。

問4 異文化の理解に関して、あなたの経験に基づいて、800字程度で自由に論じなさい。

問題文は、著者の著作権等に配慮し、省略します。なお、出典は次のとおりです。

渡部恒雄編（一九八四）『文化人類学十五の理論』中公新書
（二八三頁三行目）～（二八四頁十一行目）

平成27(2015)年度
大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程／外国人留学生選抜)入学者選抜試験問題
文化形態論専攻 現代思想文化学専門分野 専門試験
[問題用紙は1枚です。]

注意 ①解答はすべて所定の解答用紙に記入すること ②問題用紙は持ち帰ること
--

I 次のテキストを読み、全体を日本語に訳しなさい。

問題文は、著作権等に配慮し、省略します。なお、出典は次のとおりです。

Francis Collins, *The Language of God*, Simon & Schuster, 2007, p.1, 1.7-p.2, 1.5.

II 以下の語句の中から、2項目を選択し、その番号を記した上で3行程度で説明を
しなさい。

- 1 コンセンサス会議 (consensus conference)
- 2 ローカル・ノレッジ (local knowledge)
- 3 科学リテラシー (scientific literacy)
- 4 実験室研究 (laboratory studies)
- 5 唯名論 (nominalism)

III 専門性について論じなさい。

平成 27 (2015) 年度
大阪大学大学院文学研究科 (博士前期課程 / 外国人留学生選抜) 入学者選抜試験問題
文化形態論専攻 日本学専門分野 専門試験

[問題用紙は 2 枚です]

[I] 次の項目から、3 項目を選んで説明しなさい。

- (1) 官幣大社 (2) マリア観音 (3) 吉田隆子 (4) 大阪大空襲
- (5) 懐徳堂 (6) 丸山眞男 (7) 『FRONT』(フロント)
- (8) 『悲情城市』(映画)

[II] 次の 4 問のうちの 1 つを選んで答えなさい。

- (1) 昭和初期のモダニズムについて、具体的な事例を挙げながら論じなさい。
- (2) 「名づけ」「名乗り」をめぐる政治性について、具体的な例を挙げながら論じなさい。
- (3) 「多文化共生」について論じた書籍を 1 冊指定して、その内容を批判的に紹介しなさい。
- (4) 徂徠学が国学に与えた影響について論じなさい。

〔Ⅲ〕以下の文章は、Anne Maxwell, *Colonial Photography & Exhibitions* (Leicester University Press, 1999)の一部である。この文章を読んで、次の問いに答えなさい。

(1) 下線部を日本語訳しなさい。

(2) ジャポニズムについて、以下の文章を踏まえて、具体的な事例を挙げながら論じなさい。

著作権に配慮し、問題文は省略します。

問題文は上記の文献の68頁1～39行目で、下線部は17～19行目です。

平成二十七年（二〇二五）年度

大阪大学大学院文学研究科（博士前期課程／外国人留学生選抜）入学者選抜試験問題
文化形態論専攻 日本史学専門分野 専門試験（受験番号1）

【注意】問題用紙は一枚です。解答は、横書きでも縦書きでも構いません。

(I) 天皇制の特徴について、他国と比較しつつ詳しく論じなさい。

(II) 次の歴史的な名辞のうち、六つを選んで説明しなさい。

- | | | | |
|----------|--------|--------|----------|
| ① 白村江の戦い | ② 木簡 | ③ 院政 | ④ 戦国大名 |
| ⑤ 鳥原の乱 | ⑥ 百姓一揆 | ⑦ 満州事変 | ⑧ 高度経済成長 |

(III) 次の史料は、『日本書紀』天智天皇十年（六七二）十月庚辰（十七日）条および壬午（十九日）条である。その内容をできるだけ詳しく述べなさい。なお、文字は一部改めたところもある。

庚辰、天皇疾病弥留、勅喚東宮引入臥内、詔曰朕疾甚以後事属汝云々、於是再拜称疾固
辞不受曰、請奉洪業付属天后、令大友王奉宣詔政、臣請願奉為天皇出家修道、天皇許焉、
東宮起而再拜、便向於内裏仏殿之南、踞坐胡床剃除鬢髮為沙門、於是天皇遣次田生磐送
袈裟、壬午、東宮見天皇請之吉野修行仏道、天皇許焉、東宮即入於吉野、大臣等侍送至
菟道而還、

平成二十七年（二〇一五）年度

大阪大学大学院文学研究科（博士前期課程／外国人留学生選抜）入学者選抜試験問題
文化形態論専攻 日本史学専門分野 専門試験（受験番号2）

【注意】問題用紙は全部で二枚あります。解答は、横書きでも縦書きでも構いません。

(I) 近代における政変を一つ取り上げ、それについて述べなさい。

(II) 次の歴史的な名辞①～④のうち、三つを選んで説明しなさい。

①院政

②応仁の乱

③蘭学

④大正デモクラシー

(問題文は次に続く)

- (Ⅲ) 次の史料は、『明治天皇紀』一八九二年一月二二日条の一節である。この史料を読んで、①～④の問いに答えなさい。なお、文字は一部改めたところもある。

枢密院議長伯耆伊藤博文参内す、謁を御座所に賜ふ、山口県より帰京後始てなり、是れより先、衆議院の解散せらるゝや、聖旨を侍従長侯爵徳大寺実則に授け、博文に問ふに選挙対策を以てしたまふ、是の月博文小田原に帰るに及び、実則を以て再び此の事を問はしむ、時に博文政党組織の意あり、以為らく、政党に拠るにあらずんば立憲政治を行ふ能はずと、客年山口県に在りて既に同志と相約する所ありしが、是に於て実則に拠り奏して曰く、臣將に枢密院議長の職を辞し、民間に於て一政党を組織せんことを冀ふ、臣不敏と雖も、大隈重信の如く同志を集むる必ずしも難しとせざるべし、之れを率いて聊か政府を援助せんことを期す、若し聴されずんば、臣命を奉じ、全權委任を得て欧州各国に使し、条約改正の事に当らん、然らずんば清国大使若しくは公使の任を受け、李鴻章に面して朝鮮国の独立其の他東洋問題を商議せん、此の意若し聴されずんば宮内次官たらしめられよ、若し未れ是れ等の事尽く聴許を得ること能はずんば、故山に帰臥して閑雲野鶴の間に余生を送らんのみ、近日松方正義を始め山県有朋・黒田清隆・井上馨等を会して此の事を謀り、其の意見を質し、以て聖明の允裁を請はんと欲すと、博文未だ正義等に謀るの暇なし、然るに是の日拝謁したるに依り、重ねて政党を組織して内閣を援助せんことを欲する旨を奏す、天皇曰く、卿常に松方を譏り、其の器にあらずと、又大臣等一人も語るに足る者なしと云ふ、其の言虚ならずば、卿今日政党を組織して果して何人を援助せんとするか、先づ内閣を改造し、卿の信し得る内閣の組織せられたる後にあらざれば援助するに由なからん、今日の如くば、卿の組織する政党も亦改進黨・自由の両党と異なるなきに至らん、中止するに如かず、卿が進みて条約改正の事に当らんと欲するは実に可なり、宜しく自ら欧州に使して其の事に當るべし、欧州諸国の全權公使にして現に我が国に駐留するもの兩人に過ぎず、之れを理由として我より進みて欧州に抵り、談判を開始すべし、卿宜しく松方と之れを謀れど、仍りて侍従職幹事公卿岩倉具定を以て、竊かに之れを正義に告げしめたまふ

- ① 傍線部 a について、この総選挙について知るところを述べなさい。
- ② 傍線部 b の「大隈重信」が率いる政党名を挙げ、その政党の当時の状況について述べなさい。
- ③ 伊藤博文が、政党組織を許されなかつた場合に希望している処遇のされ方について、史料に即して述べなさい。
- ④ 天皇が伊藤の政党組織に反対して発言した箇所最初の五文字と最後の五文字を挙げ、その発言内容をまとめなさい。

平成27(2015)年度

大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程/外国人留学生選抜)入学者選抜試験問題
文化形態論専攻 東洋史学 専門分野 専門試験

[問題用紙は2枚です。I・II・III・IVについて、それぞれ解答用紙を別にし、用紙一枚ごとに受験番号を記入してください。]

I 英語問題

次の英文の囲い部分を, "title"の含意に注意しつつ日本語もしくは中国語に訳しなさい。
ただし, 注番号は無視すること。

問題文は、著作権等に配慮し、省略します。なお、出典は次のとおりです。

【Lattimore, O., *Inner Asian Frontiers of China*, Boston: Beacon Press, 1962 [1940]: p.66, l.6-p.67, l.10 より (ただし訳出箇所は p.66, l.16-)】

II 論述問題

中国の歴史が大きく変化した時期をひとつ選んで、その時期に政治・経済・社会・文化・宗教や対外関係にどんな変化がおこったかを、中心地域の移動にも注意しながら述べなさい。

III 古典漢文問題

次の漢文は、清代の趙翼が著述した『廿二史劄記』卷十六 新舊唐書、「新書本紀書安史之亂」の一部である。これを読んで、下の問いに答えなさい。なお、文中には設問の都合で標点を省略している箇所がある。

①歐公本紀書法，②凡反逆者，雖遣其將拒戰，亦必書逆首姓名不書賊將也。然亦有不可通者。③如秦宗權、董昌等，部將不多舉事又小，書其逆首自不至混淆。至安祿山、史思明等，地廣兵雄，遣將四出。其將又皆僭大官，擁大眾，分路專征，各當一面。④此豈得概以逆首之名書之。（中略）靈寶西原之戰，本哥舒翰與賊將崔乾祐戰而敗也，而書哥舒翰與祿山戰靈寶西原敗績。⑤潁川之陷，本賊將阿史那承慶也，而書祿山陷潁川郡，執太守薛愿。（後略）

〈語註〉

專征：受命自主征伐。

- 問1 下線部①の「歐公」とは誰か、その姓名をフルネームで書きなさい。
- 問2 下線部②を日本語に訳しなさい。なお、省略されている語なども補って意味が通じる訳にすること。
- 問3 下線部③を日本語に訳しなさい。なお、省略されている語なども補って意味が通じる訳にすること。
- 問4 下線部④を日本語に訳しなさい。なお、省略されている語なども補って意味が通じる訳にすること。
- 問5 下線部⑤を日本語に訳しなさい。なお、省略されている語なども補って意味が通じる訳にすること。

IV 基礎事項問題

次の(a)～(d)の事項について知るところを、それぞれ2行程度で簡潔に述べなさい。

- (a) 女真 (b) 朝鮮戦争 (c) ヒジュラ (Hijrah・希吉拉) (d) 永樂大典

平成二七年(二〇一五)年度

大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程/外国人留学生選抜)入学者選抜試験問題
文化表現論専攻 日本文学専門分野 筆記試験

〔問題用紙は五枚あります。〕

- 〔一〕 次の文章は、有島武郎の小説『生れ出づる悩み』の一部です。これを読んで後の問いに答えなさい。
《出典は『有島武郎全集第三巻』(筑摩書房、一九八〇年六月)四〇二～四〇六頁》

私が君に始めて會つたのは、私がまだ札幌に住んでゐる頃だつた。私の借りた家は札幌の町端れを流れる豊平川といふ川の右岸にあつた。その家は堤の下の一町歩程もある大きな林檎園の中に建てゝあつた。

そこに或る日の午後君は尋ねて來たのだつた。君は少し不機嫌さうな、口の重い、疝で背丈けが伸び切らないと云つたやうな少年だつた。汚い中學校の制服の立襟のホックをうるさうに外したまゝにしてゐた、それが妙な事には殊にはづきりと私の記憶に残つてゐる。

君は座につくとおづからばうに自分の描いた畫を見て貰ひたいと云ひ出した。君は片手では抱へ切れない程油繪や水彩畫を持ちこんで來てゐた。君は自分自身を平氣で虐げる人のやうに、風呂敷包みの中から亂暴に幾枚かの畫を引き抜いて私の前に置いた。而してじつと探るやうに私の顔を見詰めた。明らかに云ふと、その時私は君をいやに高慢ちきな若者だと思つた。而して君の方には顔も向けずに、嫌なく差し出された畫を取り上げて見た。

私は一瞥見て驚かずに眺められなかつた。少しの修練も經てはゐないらしい幼稚な技巧ではあつたけれども、その中には不思議に力が籠つてゐてそれが直ぐ私を驚かしたからだ。私は畫面から眼を放してもう一度君を見直さないではゐられなくなつた。でさうした。その時、君は不安らしいその癖意地張りな眼付きをして矢張り私を見續けてゐた。

「如何でせう。それなんかは下らない出來だけれども」

さう君は如何にも自分の仕事を輕蔑するやうに云つた。もう一度明らかに云ふが、私は一方で君の畫に哥ほしい驚きを感じながらも、いかにも思ひ届つたやうな君の物腰には一種の反感を覺えて、一寸皮肉でも云つて見たくなつた。「下らない出來がこれ程なら、會心の作と云ふのは大したもののでせうね」とか何んとか。

然し私は幸にも叫聲にそんな言葉で自分を穢す事を遁れたのだつた。それは私の心が美しかつたからではない。君の畫が何と云つても君自身に對する私の反感に打勝つて私に迫つてゐたからだ。

君が其時持つて來た畫の中で今でも私の心の底にまぎくと残つてゐる一枚がある。それは八號のキャンバスに描かれたもので、輕川あたりの泥炭地を寫したと覺しい晩秋の風景畫だつた。荒涼と見互す限りに連つた地平線の低い葦原を一面に蔽うた雲霧の隙間から、午後の日がかすかに漏れて、それが、草の中からたつた二本ひよろくと生ひ伸びた白樺の白い樹皮を力弱く照らしてゐた。單色を含んで來た筆の穂が不器用に畫布にたくきつけられて、そのまゝけし飛んだやうな手荒な筆觸で、自然の中には決して存在しないと云はれる純白の色さへ他の色と練り合はされずに、そのまゝべとりとなすり附けてあつたりしたが、それでもじつと見てゐると、そこには作者の鋭敏な色感が充分に窺はれた。それはかりか、その畫が與へる全體の効果にもじつかりと纏つた氣分が行き違つてゐた。悒鬱——十六七の少年には咄めさうもない重い悒鬱を、見る者は直ぐ感ずる事が出來た。

「大變いぢやありませんか」

聲に對して素直になつた私の心は、私にかう云はさないではおかなかつた。

それを聞くと君は心持ち顔を赤くした——と私は思つた。すぐ次ぎの瞬間に來ると、君は然し私を疑ふやうな自分を冷笑ふやうな冷やかな表情をして、暫らくの間私と畫とを等分に見較べてゐたが、ふいと庭の方へ顔を背けてしまつた。それは人を馬鹿にした仕打ちとも思へば思はれない事はなかつた。二人は氣まづく黙りこくつてしまつた。私は所在なさに黙つたまゝ畫を眺めつゞけてゐた。

②「そいつは何所ん所が悪いんです」

突然又君の無愛相な聲がした。私は今までの妙にちぐはぐになつた氣分から、一寸自分の意見をずばくと云ひ出す氣にはなれないでゐた。然し改めて君の顔を見ると、云はさないぢや置かないぞと云つたやうな眞剣さが現はれてゐた。少しでも間に合はせを云はうものなら輕蔑してやるぞと云つたやうな銳さが見えた。好し、それぢや存分に云つてやらうと私もとう／＼本統に腰を据ゑてかゝるやうにされてゐた。

その時私が口に任せてどんな生意氣を云つたかは幸ひな事に今は大方忘れてしまつてゐる。然し兎に角惡口としては技巧が非常に危かしい事、自然の見方が不親切な事、キタイプが耽情的過ぎる事などを列べたに違ひない。君は黙つたまゝ、まぢ／＼と眼を光らせながら、私の云ふ事を聽いてゐた。私が云ひたい事だけをあげすけに云つてしまふと、君は暫らく黙りつゞけてゐたが、やがて口の隅だけに始めて笑ひらしいものを瀧らした。それがまた普通の微笑とも皮肉な揶揄とも思ひなされた。

それから二人はまた二十分程黙つたまゝで向ひ合つて坐りつゞけた。

「ぢや又持つて來ますから見て下さい。今度はもつといふものを描いて來ます」

その沈黙の後で、君が腰を浮かせながら云つたこれ丈けの言葉は又僕を驚かせた。丸で別な、初な、素直な子供でもいつたやうな無邪氣な明るい聲だつたから。

不思議なものは人の心の働きた。この聲一つだつた。この聲一つが君と私とを堅く結びつけてしまつたのだつた。私は結局君を色々に邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。

「君は學校は何所です」

「東京です」

「東京？ それぢやもう始つてゐるんぢやないか」

「ええ」

「何故歸らないんです」

「如何しても落第點しか取れない學科があるんでいやになつたんです。……それから少し都合もあつて」

「君は畫をやる氣なんですか」

「やれるでせうか」

さう云つた時、君はまた前と同様な強情らしい人に迫るやうな顔付きになつた。

私もそれに對して何んと答へやうもなかつた。専門家でもない私が、五六枚の畫を見ただけで、その少年の未來の運命全體を如何して大膽にも決定的に云ひ切る事が出來よう。少年の思ひ入つたやうな態度を見るにつけ、私には凡てが恐ろしかつた。私は黙つてゐた。

「僕はその中郷里に——郷里は岩内です——歸ります。岩内のそばに硫黃を掘出してゐる所があるんです。その景色を僕は夢にまで見ます。その畫を作り上げて送りますから見て下さい。……畫が好きなんだけれども、下手だから駄目です」

私の答へないのを見て、君は自分をたしなめるやうに堅い淋しい調子でかう云つた。而して私の眼の前に取り出した何枚かの作品を自來茶葉に風呂敷に包みこんで歸つて行つてしまつた。

君を本戸の所まで送り出してから、私は獨りで手廣い林檎畑の中を歩きまはつた。林檎の核は熟した果實でたわよになつてゐた。或る樹などは葉がすっかり散り盡して、赤々とした果實だけが眞裸で果々と日にさらされてゐた。それは快く空の晴れ直つた小春日和の一日だつた。私の庭下駄に踏まれた落葉は乾いた音をたて、微塵に押しひしやがれた。豊滿の淋しさといふやうなものが空氣の中にしんかりと漂つてゐた。丁度その頃は、私も生活のある一つの岐路に立つて疑ひ迷つてゐた時だつた。私は冬を眼の前に控へた自然の前に幾度も知らず／＼棒立ちになつて、君の事と自分の事をまぜこぜに考へた。

兎に角君は妙に力強い印象を私に残して、私から姿を消してしまつたのだ。

問一 傍線部①について、「君」がこのように言い方をしたのはなぜか、考えを述べなさい。

問二 傍線部②について、「君」がこのように聞き方をしたのはなぜか、考えを述べなさい。

問三 傍線部③には、「君」のどのような心情が読み取れるか、考えを述べなさい。

問四 引用全体のなかで「私」の「君」に対する印象はどのように変わつていったのが、説明しなさい。

問五 この小説は「私」が「君」に語りかける体裁を取っている。そのことによつてどのような効果が生まれているのか、考えを述べなさい。

(解答用紙は別紙一枚を用い、縦書きにすること)

□ 以下の文章は、橋本進吉「駒のいななき」の全文である(昭和十九年発表のものだが、表記は現代のものに改めた)。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「兵馬の權」とか「巨馬の家」とかいう語もあるほど、遠い昔から軍事の要具とせられ、現下の大東亞戦争に於ても皇軍將兵と一体となつて嚇々たる武功を立てている勇ましい馬の鳴声は、「お馬ヒンヒン」という通り詞にあるとおり、昔からヒンヒンときまっていたように思われるが、

ずつと古い時代に溯ると案外そうでなかつたらしい。(『万葉集』巻十二に「いぶせくも」という語を「馬声^イ蜂音^ヒ石花^カ朝^ア頼^ト」と書いてあつて、「馬声」をイに宛て、「蜂音」をウに宛てたのをみれば、当時の人々は、蜂の飛ぶ音をウと聞いたと共に、馬の鳴声をイの音で表わしていたのである。「いはゆ(嘶)」という語の「い」もまた馬の鳴声を撰した語であることは従来の學者の説いた通りであろう。蜂の音は今日でもブンブンといわれていて、昔と大体変わらないが、馬の声をイといつたのは我々には異様に聞える。馬の鳴声には古今の相違があるうとは思われぬのに、これを表わす音に今昔の相違があるのは不審なようであるが、それにはしかるべき理由があるのである。

③ ヒンヒンは現今では hi hi hu hu ho と発音されているが、かような音は古代の国語にはなく、江戸時代以後にはじめて生じたもので、それ以前はこれらの仮名は hi hi he he と発音されていた。このイ音は西洋諸國語や支那語における、とき適唇音(上唇と下唇との間で発する音)ではなく、② 今日のアの音の子音に近い舌唇音(上唇と下唇との間で発する音)であつて、それは更に古い時代のヒ音から転化したものであらうと考えられているが、奈良時代には多分既にヒ音になつていたのであり、江戸初期に更にヒ音に變じたものと思われる。

鳥や獣の声であつても、これを撰した鳴声が普通の語として用いられる場合には、その当時の正常な國語の音として常に用いられる音によつて表わされるのが普通である。さすれば、國語の音としてヒのような音がなかつた時代においては、馬の鳴声に最も近い音としてはイ以外にないのであるから、これをイの音で撰したのは当然といわなければならない。なおまた後世には「ヒン」というが、②の音も「古くは外國語」すなわち漢語(または梵語)にはあつたけれども、普通の國語の音としてはなかつたので、インとはいわず、ただイといつたのであらう(蜂の音を今日ではブンというのを、古くブンといつたのも同じ理由による)。

それでは、馬の鳴声をヒまたはヒンとしたのはいつからであらうか。これについての私の調査はまだ極めて不完全であるが、私が気づいた例の中最も古いのは『落窪物語』の文であつて、同書には「面目の駒」と譯名せられた兵部少輔について、「音いと長うて顔つき駒のやうにて鼻のいらききたる事がきりなし。ひんと嘶きて引放れていぬべき顔したり」と述べており、駒の嘶きを「ひん」と写している。これは「ひ」がまだヒと発音せられた時代のものである故、それに「ヒン」とあるのは上の説明と矛盾するが、しかしこの文には疑いがあるのである。すなわち池田龜麿氏の調査によれば、この本文が「ひん」とあるのは上田秋成の校本だけであつて、中村秋香の『落窪物語大成』には「ひう」とあり、伝真淵自筆本には「ひと」とあり、更に九条家旧藏本、真淵校本、千陰校本その他の諸本には皆「いう」となつてゐる。そのいずれが原本の面目を存するものかは未だ判断し難いが、「いう」とある諸本も存する以上、これを「ひん」または「ひう」とであると決定するのは早計であつて、むしろ、現存諸本中最も書写年代の古い九条家本(室町中期の書写)その他の諸本におけることと、「いう」とある方が当時の音韻の狀態から見て正しいのであるまいかと思われる。そうして③「いう」の「う」は多分現在の「ん」ととき音であつたらうから、「いう」はヒンでなく、むしろインにあたるのである。

江戸時代に入つて、鹿野武左衛門の『鹿の巻筆』(巻三、第三話)に、堺町の芝居で馬の脚になつた男が眞辰の歓呼に答えて「いんくんと云ながらおたいうちをねまわつた」とあるが、この「いん」は『落窪物語』の「いう」と通ずるもので、馬の嘶きを「イ」で写す伝統が元禄の頃までも絶えなかつたことを示す通例である。

「お馬ヒンヒン」という語はいつ頃からあるかまだ確かめないが、一九の『東海道中膝栗毛』初編には「ヒインく」または「ヒノヒンく」など見えている。多分もつと以前からあつたのであらうが、これはヒの音が既に普通に用いられていた時分のことであるから、あつても差支ない。

問1 傍線部(1) 万葉集における、このような修辭的技法にあふれる用字は、一般的な用字である「正訓」や通常の「仮名」と違つて、何と呼ばれるものであるのかを答え、さらに「馬声^イ蜂音^ヒ石花^カ朝^ア頼^ト」という表記に、「訓仮名」と通じる面があることも説明しなさい。

問2 傍線部(2) について、日本語のハ行音の音価にそのような変遷が推定される根拠を、知る限り示しなさい。

問3 傍線部(3) のような子音を、國際音標(國際音標記号 International Phonetic Alphabet)では、イではなく、どのような字で表すことになつてゐるか、書きなさい。

問4 傍線部(5) は、どのようなことを言つてゐるのか、傍線部(4) の記述をも参考にしながら説明しなさい。

問5 橋本進吉の國語学における業績について、知る所を書きなさい。

(解答用紙は別紙一枚を用い、縦書きにすること)(四枚目)

- 三 次の文章は、伴蒿蹊『近世崎人伝』の一節です。これを読んで後の問いに答えなさい。
なお、文章には一部改変した箇所がある。

破鏡は、膳所の土音沼外記が妻なり。外記は、あはせを門人にて、馬指堂曲翠といひて、俳諧をもて世に知らる。妻は和泉岸和田の士の女にして、和歌を好み、つくし^この妙手なり。一とせ、夫とともに故郷に趣き、播磨路を行きめぐりし道の記をかけるなど、文章もいとよしと、見しる人語られき。予も見んとほりすれど、いまだ探り得ず。外記は、傍輩の會我権大夫といへるもの、龍をたのみて、上下のためよからぬことらもかさなり、人みな憎めどもせんかたなく齒をかみしを、おのれが家に招き入れ、悪事を責めて殺害し、その身も心しづかに腹切りて失しが、主君の非なる名を忌みて、私の争論にもてなしたれば、侯怒りて、その子内記といへるが江戸にありけるも、自尽を命ぜられて家亡びぬ。されば今もかしこには語りつたへて、忠誠を悲しむとぞ。かゝれば妻は尼になりて、堺津に隠れ住み、もとより好めるうたをよみ、糸をならして、悶を遣りける。その筆の手、今もそこに残りて、破鏡流といへりとなん。破鏡再び照らさず、といふ心をもて、難髪の名につきけるも、貞操の意に風流みゆ。曲翠の名は聞えても忠誠の実はかくれぬ。まして妻は俳諧によらざれば、その徒も知らぬ人多ければ、惜しくて聞くまゝにするす。

- 問一 傍線部Aの人物について、知るところを述べなさい。
問二 傍線部Bの語の意味を書きなさい。
問三 破鏡という人物は、何が得意であつたと文中に書かれているか、説明しなさい。
問四 傍線部a b cを現代語訳しなさい。
問五 ①菅沼外記は、どのようなことを行つた後に切腹したのか、②また、外記が行つたことを、膳所の人はどうに評価したのか、説明しなさい。

(解答用紙は別紙一枚を用い、縦書きにすること)
(五枚目)

平成27(2015)年度
大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程/外国人留学生選抜)入学者選抜試験問題
文化表現論専攻 比較文学専門分野 専門試験

[問題用紙は3枚あります。]

- 1 異文化表象を比較文学の立場から研究するにあたって、どのような問題点、課題、そして可能性が考えられるか。具体的な事例を挙げて、説明し日本語で論じなさい。
- 2 以下の詩を読んで、ア、イの問いに答えなさい。

Dante Gabriel Rossetti, Sudden Light (1854)

I have been here before,
 But when or how I cannot tell:
I know the grass beyond the door,
 The sweet keen smell,
The sighing sound, the lights around the shore.

You have been mine before,—
 How long ago I may not know:
But just when at that swallow's soar
 Your neck turned so,
Some veil did fall,—I knew it all of yore.

Has this been thus before?
 And shall not thus time's eddying flight
Still with our lives our love restore
 In death's despite,
And day and night yield one delight once more?

soar: upward flight

yore: long past

William Michael Rossetti (ed.). *The Collected Works of Dante Gabriel Rossetti*, vol.1(London: Ellis and Elvey, 1890), p.295

ロセッティ

蒲原有明訳

そのかみ (1902)

そのかみここにはありけむ
いつぞいかにと語りあへねど
さながらなりや外 (と) の藻草 (もぐさ)
鋭 (と) き美 (うま) しかをり
嘆く浪の音 (と) 磯めぐる燈火 (ともしび) のかけ

そのかみ君をば知りけむ
いつの世ぞとはえもわかねども
燕さすかたうなじを君
さはかへす時
かほぎぬおちぬ、そは昔われこそ見つれ

そのかみかくこそありけめ
うづまく『時 (とき)』にすがひゆく間 (ま) や
二人が恋はまた身に添ひ
朽ちまじとさては
夜 (よ) も日もおなじ歓楽 (よろこび) にかへれるやいざや

『明星』1902年6月号「名珠余影」より P.26

(一部、表現を改めたところがあります)

ア 第三連を英語から日本語に訳しなさい

イ 韻や用語に注意しながら、原詩と翻訳を比較し、工夫や差異について日本語で論じなさい。

- 3 次の文章は、武者小路実篤の『自分の歩いた道』（一九五六年）の一節です。読んで、ア、イの問いに答えなさい。なお、文中の「上田さん」は上田敏を指すものです。

問題文は著作権等に配慮し、省略します。

3

〔武者小路実篤全集〕第二五卷（一九九〇年、小学館）より、五三九―五四〇頁

上段 22 行 下段 13 行 ただし一部省略あり

ア この文章から、当時の実篤（たち）の西洋文学に対するどのような接し方が読み取れるか。わかりやすく説明しなさい。

イ この文章を参考にして、当時の西洋文学の受容について考える際に、留意しなければならない点について説明しなさい。

平成27(2015)年度
大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程/外国人留学生選抜)入学者選抜試験問題
文化表現論専攻 日本語学専門分野 専門試験

[1] 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

《問題文は著者の著作権等に配慮し、省略します。なお出典は、次の通りです。

風間喜代三他(2004)『言語学(第2版)』東京大学出版会 148頁13行~150頁10行》

問1 人間がものの世界を認識する方式についての伝統的な考え方に対して、下線部(1)「プロトタイプ of 考え方」はどのような特徴を持っているか、本文に書かれている以外の事例をあげて説明しなさい。

問2 「プロトタイプ of 考え方をを用いると、これまでうまく説明できなかったような現象が説明できるようになること」を、事例をあげて説明しなさい。下線部(2)に示されている文法現象でなくともかまいません。

問3 この文章に書かれている内容に対するあなたの考えを述べなさい。

[2] 次の12項目のなかから5項目を選んで説明しなさい。

- (1) 従属複文
- (2) 『言海』
- (3) 語構成
- (4) 『分類語彙表』
- (5) VOT (voice onset time)
- (6) 敬意逡減(低減)の法則
- (7) 方言認知地図
- (8) William Labov
- (9) スキャフォールディング
- (10) リテラシー
- (11) フェイスを脅かす行為(FTA)
- (12) 指標性(indexicality)

[3] あなたが今後研究しようとするテーマに関連するキーワードを5つ選び、それぞれについて説明しなさい。

平成27(2015)年度
大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程/外国人留学生選抜)入学者選抜試験問題
文化表現論専攻 美学・文芸学専門分野 (美学受験分野) 専門試験

[問題用紙は2枚あります。]

別紙の文章は、アメリカの *Lippincott's* 誌の1896年3月号に掲載された、ある建築家が書いたエッセイの序論部と結論部です。その文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

問1 このエッセイのタイトルを推定ないし想像して英語と日本語で答えなさい。(配点20点)

問2 このエッセイの筆者を推定し、その名前を英語で書きなさい。(配点15点)

問3 “The architects of this land” から始まる4行の英文を和訳しなさい。(配点20点)

問4 “Let us state the conditions” から始まる11行の英文を和訳しなさい。(配点50点)

問5 “Problem: How shall we impart” から始まる5行の英文を和訳しなさい。(配点25点)

参考: impart = 与える / sterile = 不毛の / agglomeration = 密集、集積 / evangel = 吉報、福音
proclaim = 宣言する、示す、表す

問6 “And thus, when native instinct” から始まる結論部は、一文で約330語の、このレイアウトでは23行に及ぶ、アメリカ建築史関連文献で最長の文の一つですが、そのなかに、20世紀の建築を語る上で重要な、ある「主義」の思想を最短のかたちで述べた数語があります。その箇所を英語で抜き出し、その思想は何「主義」と呼ばれているか、英語と日本語で答えなさい。(配点20点)

The architects of this land and generation are now brought face to face with something new under the sun—namely, that evolution and integration of social conditions, that special grouping of them, that results in a demand for the erection of tall office buildings.

It is not my purpose to discuss the social conditions; I accept them as the fact, and say at once that the design of the tall office building must be recognized and confronted at the outset as a problem to be solved—a vital problem, pressing for a true solution.

Let us state the conditions in the plainest manner. Briefly, they are these: offices are necessary for the transaction of business; the invention and perfection of the high-speed elevators make vertical travel, that was once tedious and painful, now easy and comfortable; development of steel manufacture has shown the way to safe, rigid, economical constructions rising to a great height; continued growth of population in the great cities, consequent congestion of centers and rise in value of ground, stimulate an increase in number of stories; these successfully piled one upon another, react on ground values—and so on, by action and reaction, inter-action and inter-reaction. Thus has come about that form of lofty construction called the “modern office building.” It has come in answer to a call, for in it a new grouping of social conditions has found a habitation and a name.

Up to this point all in evidence is materialistic, an exhibition of force, of resolution, of brains in the keen sense of the word. It is the joint product of the speculator, the engineer, the builder.

Problem: How shall we impart to this sterile pile, this crude, harsh, brutal agglomeration, this stark, staring exclamation of eternal strife, the graciousness of those higher forms of sensibility and culture that rest on the lower and fiercer passions? How shall we proclaim from the dizzy height of this strange, weird, modern housetop the peaceful evangel of sentiment, of beauty, the cult of a higher life?

And thus, when native instinct and sensibility shall govern the exercise of our beloved art; when the known law, the respected law, shall be that form ever follows function; when our architects shall cease struggling and prattling handcuffed and vainglorious in the asylum of a foreign school; when it is truly felt, cheerfully accepted, that this law opens up the airy sunshine of green fields, and gives to us a freedom that the very beauty and sumptuousness of the outworking of the law itself as exhibited in nature will deter any sane, any sensitive man from changing into license, when it becomes evident that we are merely speaking a foreign language with a noticeable American accent, whereas each and every architect in the land might, under the benign influence of this law, express in the simplest, most modest, most natural way that which it is in him to say; that he might really and would surely develop his own characteristic individuality, and that the architectural art with him would certainly become a living form of speech, a natural form of utterance, giving surcease to him and adding treasures small and great to the growing art of his land; when we know and feel that Nature is our friend, not our implacable enemy—that an afternoon in the country, an hour by the sea, a full open view of one single day, through dawn, high noon, and twilight, will suggest to us so much that is rhythmical, deep, and eternal in the vast art of architecture, something so deep, so true, that all the narrow formalities, hard-and-fast rules, and strangling bonds of the schools cannot stifle it in us—then it may be proclaimed that we are on the high-road to a natural and satisfying art, an architecture that will soon become a fine art in the true, the best sense of the word, an art that will live because it will be of the people, for the people, and by the people.

平成27(2015)年度
大阪大学大学院文学研究科(博士前期課程/外国人留学生選抜)入学者選抜試験問題
文化表現論専攻 美術史学専門分野 (西洋美術史受験分野) 専門試験

[問題用紙は1枚あります。]

問1. 以下の英文全文を日本語に訳しなさい。

問題文は、著作権等に配慮し、省略します。なお、出典は次のとおりです。

出典 N.L.Kleeblatt & K.Silver, *The Paintings of Chaim Soutine*, Munich & New York, Prestel, 1998, p.15. 1-44行

問2. 以下の12の語句についてそれぞれ3行以内で簡潔に説明しなさい。

- 1) イコノロジー
- 2) Café le Dôme
- 3) ハインリヒ・ヴェルフリン Heinrich Wölfflin
- 4) 新印象派
- 5) 《ゲルニカ》 *Guernica*. (作品名)
- 6) マックス・リーバーマン Max Liebermann
- 7) イディッシュ語
- 8) ディエゴ・ベラスケス Diego Velázquez
- 9) フォーヴィスム Fauvisme
- 10) シュテットル shtetl
- 11) フェルナン・コルモン Fernand Cormon
- 12) La Ruche